

『日本アジア研究』第17号（2020年3月）

長い在日暮らしをハンセン病患者として生きて ——金相権さん聞き取り——

福岡安則*・黒坂愛衣**

佐川修さん（園名）は、1931年、韓国の全羅北道生まれ。幼少期に母に連れられて日本にやってきた。民族名は金相権（キムサンゴン）。東京大空襲に遭ってハンセン病の症状が出、1945年3月26日に栗生楽泉園に入所。1958年に身延深敬園へ、さらに1964年には多磨全生園へ転園し、私たちがお話を聞いた2010年3月26日には、全生園の入所者自治会長のかたわら、国立ハンセン病資料館の運営委員もなされていた関係で、同資料館の応接間が聞き取りの場となった。聞き取り時点で79歳。

2015年5月に東京で開かれた「第11回ハンセン病市民学会」で福岡が実行委員会事務局長を買って出たときに、佐川さんに実行委員会委員長をお願いしたところ快く引き受けていただいたこともある。2016年5月の韓国の国立ソロクト病院百周年記念で韓国を訪問した際には、韓国テレビKBSの特集番組で佐川さんが金相権の本名で取材に応じている姿が画面に大写しになっていた。

2017年2月19日、体調を崩されて病棟に入院中の佐川さんを見舞ったときに、聞き取りの公表の許可を得た。2018年1月24日ご逝去。享年86。

佐川さんは抜群の記憶力をもとに、その語りは時間・空間を超えていく。そのため、完全には時系列にそった編集を遂行することは諦めざるをえなかった（「少し戻りますが」という質問によって、しばしば時間を巻き戻してしまった聞き手の側の責任もあるが）。栗生楽泉園での「重監房」への飯運び、1947年の「人権闘争」、1950年の「殺人事件」の目撃者としての証言は貴重だし、身延深敬園での体験、ハンセン病資料館設立の準備のみならず、休み返上で資料館の運営に心血を注いできたご苦労も、佐川さんだからこそ聞けたことである。

佐川さんの語りで際立つことは、基本的に明るいということだ。東京大空襲という地獄絵図のなかに自ら身を置きながら、九死に一生を得たひとであればこそその明るさかと思う。苛酷な現実を生きながら、彼の語りは山菜採り、栗拾いなど豊かな自然に遊ぶ。患者作業の一つとして放送部に出れば、当時流行りの「冗談音楽」を真似てみんなで楽しむ。芝居をとおして壮健者との交流を育む。

今回、聞き取りの音声おこしをして、お元気なときに佐川さんからお話を聞いてほんとうによかったと、あらためて思った。ご冥福を祈る。

キーワード：ハンセン病、隔離政策、在日コリアン、ライフストーリー

* ふくおか・やすのり，埼玉大学名誉教授，社会学

** くろさか・あい，東北学院大学准教授，社会学

本稿はJSPS科研費18K02003および19K02126の助成を受けた研究成果の一部である。なお、文責は言うまでもなく筆者自身にある。

生まれは全羅北道

1931年3月1日〔生まれ〕。79〔歳〕になったばかりです。生まれたのは韓国なんですけど、2歳ぐらいのときに、お袋が私をおぶって日本へ来たんですよ。お父さんは〔私が生まれる〕前から日本へ来てて、呼び寄せたらしい。〔東京の〕本所に森製作所というのがあって、そこの鉄工所で働いてたんだね。それで、手紙一本もって訪ねてきたわけですよ。

〔韓国での記憶はいつさい〕ない。ただ、〔生まれ故郷には〕ポプラ並木があって、その前に、湖でもないんだけど、大きい池みたいなのがあったようなのは、うっすらと覚えてるような気がする。全羅北道（ぜんらほくどう）の淳昌（じゅんしょう）〔郡〕の豊山面（ほうさんめん）斗升里（とうしょうり）というところなんですけど。裡里（りり）に近いとこだね。

〔父親が日本に来た経緯は〕なんにも聞いてない。昭和の一桁の前のほうですから、まだ徴用だとかそういうあれじゃないと思う。全生園（ここ）のなかでも、逃げてあるったけど、捕まって、軍需工場へ連れて行かれたとか、北海道の炭鉱に入れられたりした人、何人かいますけど。うちのお父さんの場合は、おそらく、自分で働きに来たんじゃないかと思えますね。

きょうだいのこと

〔私は〕8人きょうだいの長男。〔私より下の7人は日本で生まれてる。〕だけど、1人は〔昭和20年〕3月10日の空襲で死んじゃってる。キミ子という妹が6歳で死んだ。〔あとは、成長してからだけど〕弟が希硫酸を運ぶトラックを運転していて、交通事故で死んじゃった。その下の妹も乳ガンで死んじゃった。〔きょう代いは〕みんな結婚して、子どもも孫もいます。それで、弟や妹は、みんな帰化しちゃった。昭和25年に朝鮮戦争があったでしょ。お父さんが、その前に、闇で少し儲けたもんだから、それで韓国（むこう）へ行行って、家（うち）を買ったり土地を買ったりして、みんなを呼び寄せようと思ったらしいんですよ。ところが朝鮮戦争が始まっちゃって。もう、ゴタゴタになって、行方不明みたいになっちゃって、連絡しても全然、連絡取れなかった。それで、お母さんが〔昭和〕30年以降になって、探しに行った。そうしたら、自分の娘みたいな女の人と一緒にあって、子どももいるっていうんですよ。だけど、生活が惨めで、持って行ったお金、全部置いて帰って来ちゃったんですよ、お母さんは。それで〔韓国へ帰ることはもうないと〕家族は全部帰化しちゃった。いまでもみんな集まるときあるんですけど、24人ぐらいいますよ、子どもまで入れると。孫もいるからね。

軍国少年、金本相権

ぼくは〔尋常小学校〕2年生までは、日本語読みの「金相権（きんそうけん）」で錦糸町の錦糸小学校へ行行った。3年生からは亀戸へ越して、水神（すいじん）小学校へ行行った。5年、6年のときは剣道部へ入って寒稽古をやったりして、東京都大会へも出たですよ。1回戦で敗れちゃったけど。〔勉強は〕好きで、〔歴代の〕天皇の名前なんかすぐ覚えちゃいました。124代まで。教育勅語だとか暗記するの、ほんと1、2番目に覚えちゃいましたね。

〔日本人からの差別？〕なんにも差別なかった。不思議なんだけどね。亀戸へ行行って、「金本」になっても、なんにもぼくには差別なかったですね。〔金本

相権（かねもとそうけん）になったのは、ちょうど創氏改名が行われた] その頃です。[ぼくは] 級長をやったですよ。杉山っていう [男の] 先生がすごくいい先生で、5年、6年、剣道をやったのもその先生に勧められたからだし、高尾山や、千葉の貝塚だとか、方々へ連れて行ってもらった。プラネタリウムが東京と大阪しかない時分に、有楽町の、いまのそごうビルの上にあったんですよ。そこの天文台へ行って、有名な先生に説明してもらったら、眠くて眠くて、眠っちゃったのを覚えている。[先生が連れて行ってくれたのは] みんなではない。3、4人が、自宅（うち）までも呼ばれたですよ。気に入られていたことは確か。なんだか知らんけど、その先生には、えらい、よくしてもらった覚えがある。先生の言うことはとにかくよく聞いて、神社の前では立ち止まってお辞儀してから通り過ぎたような軍国少年だった。それで、毎朝、先生は、明治天皇の〔詠んだ〕短歌をかならずやって、それから授業を始めるんですよ。工業学校へ行ったときも、修身の先生が「敬神崇祖（けいしんすうそ）というものは」ということから始めて、それから授業を始める時代でしたからね。

東京下町の子ども時代

最初〔住んでいたの〕は、本所の石原町。昔の両国国技館のすぐそばでした。お父さんはその森鉄工所というところで働いてた。お母さんは毛糸の編み物の内職。〔父は〕真面目でよく働いたことは働いたみたいですね。それでも、〔昭和〕19年頃になったら辞めちゃったですね。亀戸から本所まで自転車で毎朝通うのが遠いから辞めちゃって、焼き芋屋をやったのよ。焼き物がなくて煙で燃した。その煙を横っちょへ置いといたら、他の人が煙草の吸殻を投げて、それが小火（ぼや）になっちゃって、警察に2日ぐらい泊められたことがある。それで空襲〔が頻繁にあって〕、隣の人が〔隣組の〕組長だったんだけど、唾（おし）の女の子が1人いた。ところが横着して、空襲になっても、全然〔家から〕出てこない。空襲でみんな逃げたときも、自分たちは寝てて、唾の女の子1人が助かっただけで、組長さん親子3人はみんな死んじゃった。いつもと同じだと思っていたかなんか知らないけど。

〔ぼくに対しては父親は〕ほったらかし。お母さんはぼくを大学まで出すんだって、一生懸命、編み物の内職をやってました、夜〔遅く〕まで。だけど、お父さんもお母さんも無学なんですよ。字が書けない。〔両親とも朝鮮で学校へ〕行ってない。だから、区役所へ行って何かやるとき、3年生頃から、ぼくが行って書いてました。〔両親は、日本語を聞いたり話したりするのは〕わかるんだけど、字が書けなかった。1から10ぐらいまで、勘定の数字（あれ）しか書けないようだった。〔あと〕自分の名前がやっと書けたけど。

〔母親は〕国防婦人会とかそういう大きい会合（あれ）は出てなかったけど、隣組の〔防火〕演習のときには出てました。どぶ板があって、お稲荷さんがすぐそばにあって、まわりはみんな貧しい人ばかり。それでもみんな、一生懸命生きていたから。

〔学校の習字や図画の道具は買ってもらえたか、ですって?〕剣道の竹刀も胴着（きるもの）も、学校で使うものはみんなお母さんはくれましたね。弟は、みんなおさがりです。シャツでも上着でもみんなおさがり。〔服を破って帰ることはなかったか、ですって?〕ぼくは、あまり、腕白はしなかった。本ばかり読んでた。本も、買えないから、友達のを借りて。それ夜読むと「電気が

もったいないから消せ」って怒られた。『冒険ダン吉』だとか『のらくろ』だとか漫画の本もよく読んだし。『少年倶楽部』なんかもよく読んだし。弟はメンコやベーゴマが好きで、箱いっぱいメンコを集めたりしていたけど、ぼくはそういうものはいっさいやらなかった。

〔まわりは日本人ばかりだから〕うちのお母さんも、朝鮮語を使うっていうことがないですね。でも、9月1日になると、外から2、3人来るんですよ。おじさんかだれかが関東大震災のときに死んだみたいで、その供養をうちでやってたんですね。そのときはいろんな果物をあげたりなにかして、後からもらうから嬉しくて。

〔うちの食生活?〕日本の食事とそんなに変わらないけど、キムチだけはありましたね。自分で漬けて。もやしなんかも作ってました。樽を押入に入れて、そこに豆を入れて〔伸びてきたのを〕上から採って食べる。とにかくお母さんは、字は知らなかったけど、料理は上手でした。全生園(ここ)へ一回、面会に来たときに、キムチを作って持ってきた。そうしたら、いろんなキムチ、商人もいっぱい〔売りに〕来るし自分で作る人もいるんだけど、「お母さんみたいな美味しいキムチはない」って、みんな言っていました。ほんとに味だけは、すごくよかったです。ただし、妹たちが誰も習ったやつがないんですよ。「おまえたち、なんで、そのとき、習っとかなかった！」って言ったんだけどね。

〔小学校6年が終わると〕高等小学校へ行く人が多かったんだけど、ぼくは行かないで、14歳で足立の工業〔学校〕へ入った。あの時分は軍人になりたいというのが、みんな圧倒的な志望(あれ)ですわ。実際に予科練へ行ったのもいましたし。ぼくも、最初は軍人と思ったんだけど、先生が「おまえ、工業へ行け、工業へ行け」つうんで、先生が言うからしょうがねえなど。戦争中だからもう、勉強、ろくにやった覚えがないんですよ。「修身」と「機械工作」と、あとは「工業大意」だとか。数学なんかもろくにやらなかったし。英語はいっさい使わないし。それで、週に2回ぐらいは、南千住の軍需工場へ行ってたし。あとは、教練ばっかりさせられたし。だから、勉強は10のうち4ぐらいしかやってないような感じでしたね。

大空襲で発病し、栗生楽泉園へ

ぼくは〔昭和〕20年3月10日の空襲で、発病しちゃったんですよ。亀戸というところにいたんだけど、逃げ回って。もう、あちこち崩れてきて。防空頭巾や服にみんな火が点いたりして、煙に巻かれちゃって。もう駄目かと思ってぶっ倒れてたら、よその大人の人に「しっかりしろ」って引っ張られて。亀戸の総武線の線路と小名木川のほうへ行く貨物線の線路がある。そのあいだに、ちっちゃい池があるんですよ。そこへ連れて行ってもらって。30人ぐらいが避難してて。火の粉が飛んでくるから、バケツで交替で頭から水を掛けたりして、朝まで待った。朝になって、線路の上へあがってみたら、もう、死体がゴロゴロ。上のほうの人はマネキンみたいに白くなって、その下は真っ黒になって死んでて。街を見たら、なんにもない。全部焼けちゃって。ところどころに質屋の金庫みたいなのがちょっとあるだけで、なんにもなくて。それで、見たら、軍隊の人が来て、死体をみんなスコップで道路の端っこへ積み上げて。駅のほうへ行ったら、階段も折り重なって死んでるし。電車は出ないし。25、6人の人がいたんだけど、どっかへ行かなきゃしょうがないというんで、線路

の上を千葉のほうへ向かって、亀戸から平井、新小岩、小岩、それから江戸川を越えて市川まで行ったら、ようやく電車が出たんですよ。それに乗って、千葉の親戚のうちへ行ったら、お父さん、お母さんがいた。それで「キミ子は、どうした？」って言うんで、ビックリして、「お母さんと一緒じゃない？」ついたら、お母さんは「エッ」つったきり、それっきり。ほんと、死んだのか誰かに助けられたかはわかんないけど。——〔1974年放映のNHK連続テレビ小説〕「鳩子の海」ってありましたよね。空襲に遭った女の子が他人（ひと）に助けられて育った。その子のことを見たときに、キミ子もこうやって生きていりゃあいいなあつうんで、お母さんが「尋ね人で出せ、出せ」ついたらしいけど。子どもたちはみんな自分のことで忙しくて、そんなのを出す人は[いなかった]。

ぼくは、その〔昭和〕20年3月の空襲に遭って、火の中、逃げ回って。防空頭巾なんか穴だらけで、足も火傷して、手も火傷したんですよ。それで、一晩で顔に真っ赤に斑紋が出ちゃって。千葉の大学病院で診察して。治療したあと、先生が「ちょっと待て」つって。顔を見て、突っついたり撫ぜたりして、「どうも、これ、レブラみたいだから、多磨全生園というところへ行きなさい」つって、紹介状（てがみ）を書いてもらって、全生園（ここ）へ来たんですよ。〔訪ね〕訪ねてようやくここへ来たなら、「ここは空襲で危ないし、定員もオーバーしてるから、草津のほうへ行きなさい」つって。お母さんには「この病気になったら、生きていても、この先大変だから、あんちゃんは、もう、死んだほうがいいよ」つって、そう言われたんだけど、ぼくは空襲であれだけ死体見たら、死ぬのなんかなにも怖くなかったけど、「行くだけ行ってから考えるから」つって、お母さんから5円もらって、うちを出たんですよ。ところが、地理がわからなくて、高崎で降りちゃって。それでおまわりさんに聞いて、渋川の駅へ行ったら、もう夜の5時頃になって、もう電車もバスもない。駅〔舎〕はガラスがみんな割れてる。ビュービュー風が吹くもんで、ぶるぶる震えて、朝までそこで徹夜して。朝10時頃、ようやく長野原行きのバスが出たんですけど。それが戦争中だから木炭車なんですよ。2回も3回もエンコして、直したりして、長野原へ着いたら午後1時。ところが、そこから草津の町まで3里でしょ。〔栗生楽泉〕園までは、さらにそこから3キロぐらいある。だけど、行かなきゃと思って、歩きだしたんだけど、雪がね、3月26日、膝まであった。寒さもその当時は、氷点下15度、16度なんてのが毎日のようにになりましたから。それ、ぼく、〔楽泉園で〕放送部勤めてて、朝、いつも寒暖計見て、「今朝の温度は何度でした」つって放送するから覚えてるんだけど。ほんと〔零下〕15度、16度っていうのがしょっちゅうあった。

その3里の道を歩きながら、何回も転んだり。2日間、なんにも食べない。お金はあるんだけど、物が売ってない。グウグウ腹は鳴るし、傷は痛むし、冷たくて寒くて。〔そのとき、防寒具に身をまとってたわけじゃないけど〕それでも防空頭巾を被ってたし、オーバーは着てたんですよ。それで、ズック靴履いて。ゲートルは巻いてた。——いつも寝るときは、ゲートル巻いたまま寝てた。防空頭巾と上着と鞆を〔枕元に〕置いて、いつでも逃げられるようにして寝てたんですよ。そのときは、ほら、足立の工業学校の1年生だったんですよ。それで、機械工作や製図の本だとかを入れた鞆を持ってて。

それで、途中で何回も谷底へ覗き込んだじゃあ、お母さんが言うように、これは飛び込んだほうが楽かなあと思ったんだけど。まあ、せっかく来たんだから、

もうちょっと歩いてみようつって、草津の町へ行ったら、もう、夜の7時頃。氷柱が下がってるんですよ。いまは賑やかだけど、あそこらへんは三軒家つって、うちが全然ないんです。そこんところを通って、官舎〔地帯〕へ入っちゃって。それで人がちょうど通ったから、聞いたら「下だ、下だ」つうんで、行ったら、また〔附属〕保育所へ入っちゃった。またそこで聞いて、正門がようやくめっかって。それで、分館へ行ったら、当直の人が話を聞いて〔くれて〕、「空襲で〔ひどい目に遭ったのか〕。あんた、かわいそうだから、いい部屋へ入れてあげるよ」つって、「白馬（はくば）」の4号へ連れて行ってくれたんですよ。その当時、12畳半に囲炉裏が切ってあって、炬燵はしてあるんですよ。寝るときは炬燵を取っちゃうんだけどね。ところが、ガラス窓が隙間だらけで、雨戸がない。隙間から雪がピューピュー入ってきて。掛布団一枚、敷布団一枚の上に、着てきたオーバーからズボン、靴下まで、みんな載っけて寝ただけど、寒くて、猫みたいに丸くなって寝て。朝起きたら、吹き込んだ雪が10センチぐらい積もって。水道へ行ったら、顔を洗おうと思ったら、蛇口にピタッと手がくっついて離れない。「引張ったら、皮が剥けるぞ」って言われて、水を掛けてもらって手を離れたんですよ。それで、「下に温泉があるから入ってこい」つうんで、藤の湯へ降りて行って入った。帰りに手拭いをこうして来たたら、〔手拭いが凍りついて〕ピュンと立っちゃうんだ。こんなところで住めるかなと思ったんだけど。それよりも食べ物がひどかった。2日間、なんにも食わないでいたんだけど、朝出た飯がどうしても喉を入らない。それこそ、米粒がひとつもない。麦に、サツマイモの種芋の腐ったようなのが混ぜ飯になってるんですけど、プーンと臭いがする。食いたいんだけど、喉に入らない。見たら、みんな平気で食ってる。これは食べなきゃ死んじゃうと思って、お湯かけて、もう流し込むようにして食べたですよ。

それで、「おまえは運がいい。4、5日前に亡くなった人のお膳があるから、これをおまえにタダでやるよ」なんて思着せられて。箱膳なんですよ。湯呑が1コと茶碗と箸とお椀とある。それをずっと使った。

昔は膿と血の臭いがきつかった

〔家族でハンセン病になったのは自分一人だけ。おじやおばにも〕全くない。

〔大学病院には〕一人で〔行った。「レプラ」と言われても意味が〕わかんなかったんだけど、まわりにインターンの人が5人ぐらい、白衣着ていたんですよ。先生が「レプラ」と言ったとき、みんな、パッと二三歩さがった。それで、これは容易じゃない病気かなあって思ったんですよ。だけどまだ、どんな病気かはっきりわかんなかった。そうしたら、「全生園へ行け」つうんで、ここへ一人で来た。来たら門衛が仰々しくいて、診察のときもみんなマスクして、長靴履いて、手袋してやってるから、これは大変なところへ来ちゃったなあと思って、びっくりしたんですけどね。〔そこで「癩病」だと〕わかった。〔でも、癩病に関する知識は〕全然なかった。

お母さんはもう知ってた。「千葉の大学病院で、手紙を持って〔全生園へ〕行けって言うから、そっちへ行くよ」つって、全生園（こっち）へ来たんだけど。そのときはもう、お母さんは知ってるんですよ。〔その頃は〕親戚のうちへ厄介になってた。親戚の人もぼくの顔に斑紋が出てのを見て、もうみんな感づいてたですよ。癩だちゅうことで。いまと違って、当時は傷なんか臭いまし

たからね。ぼくは草津¹〔の栗生楽泉園〕へ入って、初めて医局の玄関に入ったら、途端にプーンと膿(のう)と血の臭いが鼻につきましたからね。いまはそんなことないけど、昔はそれだけ傷がひどかったんだ。全生園(ここ)でも、頭のとっぺんから足の先まで傷があって、看護婦2人で治療するのに半日かかるという人もいましたからね。とにかく、傷が多かった。プロミンが出るまでは、この病者は傷が最大の難敵(あれ)で、それでみんな指を切ったり、手を切ったり、どんどん悪くして、義足になったり。で、薬がないでしょ、当時は。なんにもない。ただ、リバノールを付けて、赤チン付けて、それで縛っておく。包帯もきつく巻くから、だんだん血管が締められて細くなっていく。そのうちに、手がさがっちゃうのよ。ぼくは〔療養所に〕行くときは、まだ全然使えたのに、草津に行ってから手がさがっちゃった。さがっちゃったから、こんど、左で食べたり、仕事をしたり、書いたりするのに、習うのに、もうほんとに苦勞しましたけど。それでも、舎の人とおんなじように、なんでもやんなきゃ。山奥へも背負子を背負(しょ)って、木を伐りにも行ったし。

〔ぼくが行ったときの楽泉園の本病の治療は〕大楓子でした。大楓子を、男も女もみんな一緒に並んで、お尻出したり、肩出したり、股を出したりして、打ってもらいました。針が切れなくなると、研いで、またやったりするから、〔今頃になって〕C型肝炎だなんつって、けっこう問題になったけど。

〔大楓子は〕私には効いたと思う。斑紋がスーッと引いちゃった。プロミンも116本打ったんだけど、プロミンは効いたって感じしないですね。先生ご存じでしょうけど、ハンセンは3つの型(しゅるい)があって、ぼくたち神経らいの人は、あんまり〔プロミンの効果は〕感じなかったな。大楓子のほうが、痛いだけ効いたような気がする。〔プロミンは昭和〕24年頃から打ち始めて、〔ぼくは〕1年か1年半ぐらいしか打たなかったな。〔ぼくは〕そもそも、その当時から菌はなかったですよ。一回も菌なんか出たことないですね。

おらかな雰囲気のある栗生楽泉園

〔楽泉園に入ったとき、ぼくは空襲のときの火傷で〕手も包帯、足も包帯してるんだけど、舎の人と一緒になんでもしなきゃならない。それで、炊事〔場〕からの飯運びをやった。途中で、一回滑って転んで、おつゆみんなこぼしちゃって。「また、もらってこい」つうんで、謝ってもらってきたりして。だけど、おつゆといっても、実(み)がほとんどない。「おい、今日はウズラの卵、入ってるぞ」「なんだ、目玉が映ってんだ」なんつって、冗談を言った人がいたけど。ふだん草というのをみんな作ってて。葉っぱがね、こんなでっかい葉っぱになるやつ。下から1枚ずつ搔(か)いて、それをおつゆに入れて。

だけど、あそこは春先になると、まわりの山へ行けば、わらびも採れたし、野びるだとか、ふきのとうだとか。〔それから〕真っ白い乳が出てベタベタくっつくやつがあるんですよ、キノコで。それがまた、油で炒めるとものすごい美味い。それを採りに行く。容れ物がないから、長靴を脱いで、その中に入れて。山遊びはずいぶんしましたね、あそこでは。

〔栗生楽泉園に入所して、どのぐらいで、なかなか退所することはできないってわかったか、ですって? 療養所へ〕入って、まわりの人の話を聞いていると、最初自分が思ってたこととは違うんだなあと。やっぱり、この病気というのは、容易なもんじゃないんだなあと。社会へ出るだけでも、これは大変だ

なあというのは、だんだんわかってきて。だけど、草津は、湯之沢があった関係で、比較的ほかの療養所とは違って、おおらかなんですよ。町へ行ったり来たりも平気でできましたし。〔湯畑から湯を引っ張ってくる〕木管を取り替えたりで温泉が出ないと、町の風呂へ入りに行ったんですよ。「御座の湯」って露天風呂があるんです。そこへ行くと、町の女の子も一緒に平気で入ってました、混浴だから。だけど、夜あそこから帰ってくると、遠いから冷えちゃう。

かなり後〔になってからは〕温泉の旅館で人が足らなくて、番頭になった人たちもいるし。八百屋の手伝いをやったとか、いろんなところへ、みんな働きに行っていましたね。

〔楽泉園では〕いろんな〔患者〕作業をしました。図書係もやったし、放送係も。放送係で当直して、朝、気温（おんど）のお知らせからやって。本を読んで聞かしたりということもやった。ぼくは、他の療養所は全生園（ここ）と身延深敬園を知ってるけど、草津がちょうど青年期だったから、いちばん思い出があるんですよ。あそこで、芝居、10年やりました。青年会もずうっとやって、団長もやった。青年会では、いろんな音楽をやったり、青年会新聞をだしたり。中原弘²、知ってますよね。中原さんと中垣さんとぼくと宮沢という4人は、ほんとの友達で、年中集って。タクワン食って、お茶飲んじゃあ、女性（ねえさん）たちも一緒になってトランプやったりしていた人なんですけどね。冨〔雄二〕さんたちも一緒に綴り方教室³をみんなでやった。全患協で生活記録を募集して、『深い淵から』⁴っていう本を出した。そのときに〔全国の療養所から〕みんな応募したんだけど、草津から載ったのは、ぼくと中原弘と2人だけなんですよね。〔楽泉園には〕達者な文章を書く人がいっぱいいたんだけど、そういう人たちはみんなボツになっちゃって。〔編者は〕堀田善衛だったかな。〔その前に短歌集で〕『陸の中の島』⁵というのもあったし。写真集なんかもあったしね。

炭背負いと人間鉄柵、火葬当番

炭背負いも何回もしましたよ。〔花敷温泉のほうまで取りに〕行きました。けっこう〔距離〕ありますよ。5キロぐらいある。川を越えて。あの当時は、11月から3月頃までは〔雪が〕あったんじゃないかなあ。真冬は〔炭背負いの作業は〕なかったと思ったけど。雪のあるときでも行ったことはありますよ。滑って転ぶから、みんな長靴に縄を巻いて。炭を焼いてる小屋のところまで行って、そこから直接背負ってくる。それ、鈴木幸（こう）ちゃん⁶は強かった。頼まれて、5円もらって人のやつまで背負って。あの人は、3俵も4俵も背負ってくる。〔ぼくは〕まあ一人前。2俵ぐらい。だけど、あれ、四貫俵（よんかんびょう）だった。〔2俵で〕32キロぐらいあるから、けっこう重いですよ。

昔は〔とにかく歩きました〕。〔中之条町の〕暮坂〔峠〕まで歩いて行きましたよ。それに、〔草津〕白根〔山〕のてっぺんまで、ぼくたち、〔朝〕3時頃起きて、ブドウを採りに行きました。もう、どこまでも歩きましたから。

〔炭背負いのほかに〕人間鉄柵つって、火葬場の下〔の谷〕から〔伐採した丸木を担ぎ上げた〕。なんの道もないところを、足場をこしらえて、みんなが向かい合わせて、こう、一歩ずつやって。火葬場まで上げて。

それで、〔死人がでると〕世話係が4人で当番で焼くんですよ。ぼくはその世話係をやったから、何人も焼きました。戦後は、町で死んだ人まで焼いた

もの。〔当時〕町に火葬場がなくて、こっちへ〔遺体を〕持ってきたですよ。

火葬場の蓋が焼き切れちゃった〔ことがある〕。火が吹き出て、まわりに塗った泥が燃えてくる。火がつくと〔その泥が〕みんな落ちて〔しまう〕。どうしても直さなきゃというんで〔改修してるあいだ〕、火葬場のすぐそばに穴を掘って、露天焼きをやったですよ。露天焼き、ぼくも一回やった。——それで、みんなが覗き穴から覗いて、「かならず起きるぞ」つって。そうすると、燃えてくると、グッと〔遺体が〕半分起きて、こう、倒れるんですけど。露天焼きのときに、それがハッキリわかった。グウッと上がって、また下がる。露天焼きも、だけど、みんな上手なもんで。下に木をいっぱい置いてね。それで棺桶を置いて。その上へまた木を置いて。いっぱい焼けてきたら、その上へ炭をバァッと一俵ぐらいやって、上へ濡れ簀を被しておいてね。それでやると、きれいに焼けるですよ。

それで、〔葬儀の参列者は〕みんな、あそこへ〔棺を〕置いたら、一回帰っちゃいます。後から骨拾いに来る。その骨拾いの前に、自分たちで出して見て。焼けてない部分（やつ）があったら、谷底へ捨てちゃうんですよ。地獄谷へ。それを〔見て〕カラスがカアカアカアカアって騒いでるけど。家族はそんなもの関心ないから。それで、そこでは〔主立った〕骨だけ入れて、余った骨は、横っちょにコンクリの箱（あれ）があって、そこへみんな揚げちゃうんですよ。ところが、その骨を洗わしてくれつって、業者が来たですよ。当時で5千円ぐらいだったんですけど、業者が自治会に払った。それで、〔残骨を〕網へ入れて、水を掛けて、金歯を拾ってたのよ。だけど、2、3回来たら来なくなったから、あんまり〔金になる金歯が〕採れなかったかしんないな。それとも、みんなが覚えちゃって、自分たちでめつけて、先にとっちゃったか。

その火葬場の灰というか〔残った〕お骨をね、カボチャの肥やしのなかに入れた入所者（ひと）がいるんですよ。「これはポカポカする」つって。スコップへ何杯も入れてやったら、カチカチの、鉋で割らなきゃ割れないようなカボチャができたって、大騒ぎしたことがある。骨粉が効きすぎちゃったらしい。

それで、青年会で、諏訪神社と火葬場と、ずうっと回って来る肝試しをやるんですよ。順に、一人が行ったら、10分ぐらいしたら次の人が出る。火葬場は怖くないんですよ。火葬場よりも、火葬場から下りて、諏訪神社へ行くところのほうが、なんだか怖い。そこらへんへ行くと、「オーイ、オーイ。いるかあ」なんて声出して、先へ行ったのを確かめながら行ったんだけど。〔諏訪神社は、あそこで自殺したりした入所者がいたからね。〕けっこう大きい神社です。お祭りは賑やかなんですよ。いっぱい〔出〕店が来るんですよ。

重監房の飯運び

〔重監房の飯運びですか？〕ああ、やりましたよ。重監房はね、おなじ白馬舎（へや）の金岡さんという〔朝鮮人の〕人がやってたんですよ。その人がブローカーやってて、在（ざい）へ、年中、物々交換に行って、豆を買ってきたりなにかして。そのうちに肉を持ってくるようになって。4人ぐらいで吠（かます）背負って行って。それで、牛〔一頭〕を買って、殺して、ばらして、そっくり担いでくる。そうすると、夜中に寮舎（へや）のなかで、牛脂（ヘット）取りながら、〔肉を〕料理する。〔療養所の中でいちばん食べ物がなかった時期に〕その肉を食ったりなんかしたから、ぼくは死なないでいたんじゃないかな。栄養を

摂れたから、と思うんだけど。朝になると、どこで聞いたか、園内の方がズラァッと並んでるんですよ、〔肉を〕買うのに。おれは〔命じられて、肉を〕届けたりして。〔あるいは〕柿の木、一本そっくり買っちゃって。その柿をみんな採って持ってきたり。〔その人は〕いま思えば、40 なるかならないかぐらいじゃないかなあ。昔は、もう 50 歳だというと、えらい大年寄りで、この人はもう、あと何年もないなと思ったんだからね。自分が 80 になるのに、そんなこと〔言ってはなんだけど〕。ほんとに当時は、みんな、そんなに生きられないと思ってたからね。

その人が年中、外に行く。ぼくに「明日いねえから、おまえやれ」つうんで、代わりに〔重監房の飯運びに〕ちょこちょこ行ってたんですよ。で、その人が〔終戦後〕韓国へ帰っちゃった。それで仕方なしに、ぼくがやるようになった。〔あの時代、ハンセン病患者が韓国へ〕帰れたんですね。下関まで行って、〔結局、韓国には〕行けなくて帰ってきちゃった人も何人もいるみたいですけど。菊池〔恵楓園〕なんかでも、けっこう〔韓国へ〕帰ってる人がいるんですよ。〔昭和〕20 年、21 年の始め頃までは〔日本と韓国のあいだの人の移動は〕まだそんなにうるさくなかったんじゃないか。〔取り締まりが厳しくなったのは、昭和〕22 年頃でしょ。それまでは帰れた人がいるのよ。駿河療養所からも帰った人がいたし。〔帰ったのは〕後遺症がほとんどない人ですね。

〔重監房への飯運びは〕炊事場から、小さい木の箱に〔飯を〕ドタッと入れたやつを〔受け取って〕、岡持ちに〔入れて運ぶわけだけど〕。〔飯の分量は〕まあ、おにぎりにすりゃあ、大きい 1 個ぐらいなもので、あと、梅干しがつくかタクワンがつくか。それで、ときどき、味噌をつくるのに大豆なんか煮ると、炊事のおばさんが「あんちゃん、やるよ」なんて、一掴みくれたりして、それを食べながら運んだこともあるけれど。正門のところに門衛がいたんですよ。その門衛に訳（わけ）話して、薬罐もらって、それを持って行って、お湯を注いでやって、弁当を〔差し〕入れてやるけど、ほとんどものを言わないですね。言わないけども、鈴木〔秀夫〕っていう人は、頭が狂っちゃって。それで、もう死ぬ 2、3 日前から、「カラスが来た。カラスが迎えに来た」とかって。それで、「いつもご苦労さんだ。お礼だ」とかって、〔空になった弁当箱を〕出したら、固いウンコがね、載っかってンですよ。なあーに、ろくに食ってないのに、よくこんな上等なものが出るなと思いつつながら、びっくりしちゃって。「ナンダァッ」つって、それ投げちゃって。それで、箱だけ持って〔帰って〕、分館へ〔行って、彼が精神に異常を来（きた）しているから、放っておけないのではないかと〕話したら、〔逆に〕「あしたは、もう、飯は、そいつはやらなくていい」つって、1 日抜かして。次の日行ったら、昨日〔食事を〕抜かれたこともわからないで、クロツとして、「ご苦労さまです」つって。そうやっていたけど、その次の日には、死んじゃったな？

それから〔ぼくが飯運びしていたときに〕死んだもう 1 人の人も、3 人でお通夜したんですよ。分館の職員と、それから青柳さんつって、半年にいつペンぐらい〔収監者を外に〕出して、頭を刈ってやったり爪切ってやったり、そういう〔ことをする〕患者がいたんですよ。その人と 3 人でお通夜した。とにかく、髪も伸び放題。その人もずいぶん〔収監が〕長かったな。あれは、ほんとに、30 日以上は〔監禁しては〕いけないわけなんだけど。もう、1 年以上も。440 日くらい入れられていた人もいるし。

『ハンセン病 重監房の記録』（集英社新書、2006）を書いた〕宮坂〔道夫〕先生がつくった一覧表⁸を見ましたか。〔重監房に収監されて死んだ人の数は22人だとか23人だとかって言われているけど、その数字は昭和22年の人権闘争のときに国会調査団に提出するために大急ぎで作成した資料に基づいている。とても完璧なものとは言えない。〕実際は〔死者の数は〕あれよりももっといましたよ。〔少なくとも〕あれに載ってなくて、ぼくが知ってる人が1人いるもの、死んだ人が。——雪の降っている朝、門衛のところへ行ったら、「昨日、1人入った。その人に付け届けがあるから、持って行ってやれ」って言うんですよ。なんだろうと思って、途中でそっと開けてみたら、うまそうなお饅頭が10くらい入ってる。1個くらいわかんねえだろうと思って、こう、やりかけたけど、まあまあ、しょうがねえつって、また蓋した。その次の朝行って、「おーい」ついたら、〔応答する〕声がないんですよ。〔昭和〕21年の冬、春先になったかならないかぐらいのときで、それ、門衛に言ったら、「おっ、死んだか」なんて平然とした顔をしてるんですよ。あの饅頭、食ってたら、おれももしかしたら死んだんじゃねえかなと思って、ゾッとした覚えがあるのよ。怖い話ですよ。そういう覚えがあるんだが、その人は〔一覧表に〕載ってないですよ。

〔重監房に入れられた人は、他の園から送られてきた人が〕多いですけど。〔楽泉園の〕中の人、博打なんかやって入れられた人がいるし。それで、博打やって入れられた人が、「2週間後に出してやる」って言われたのが、〔なかなか〕出〔してもらえ〕なくて、それで、気いもんじゃって。〔その頃は飯運びは私じゃない人がやっていたんだけど、その人が〕行って、〔帰ってきて〕「おい、大変だ」と。〔重監房に〕入るとき、ぜんぶ身体検査するんだけど、〔その博打をやった人は〕こんなちっちゃいナイフみたいなものを持って、毎日、ご飯入れるところの木の枠のところを、こうやって〔削って〕、ポンと押せば、もう取れるばっかりになってた、と。ところが〔出獄の予定が〕1週間以上伸びちゃったけど、ちょうど明日出してやるっていうことがわかったんで、それでびっくりして、その人を出しに行くとき友達もみんな連れて行って、みんなで背中を隠してそこへ泥を塗ってきたって、そういう話もあります。

〔やっぱり、他の園から送られてきた人に〕死んだ人が多いですね。〔重監房から〕出てからすぐ死んじゃったような人も多いし。とくに〔熊本の〕本妙寺部落の幹部だったっていうだけで入れられた人がね、かわいそうだったですよ。

〔わたしが飯運びの仕事をしたのは〕半年ぐらいです。〔昭和〕20年の10月から11月から21年の春ぐらいまで。〔重監房は昭和〕22年の人権闘争までありましたからね。ぼくの後には誰だったかな。村上さんだったか、太田さんだったか、〔いずれにせよ〕「白馬」の人は「白馬」の人だったけど。「白馬」には、金岡さん、村上さん、太田さんもいた。鈴木幸次（こうちゃん）も1号にいた。重監房の飯運びした人が「白馬」には何人もいたんです。ぼくも「白馬」の4号にちょっといた。〔誰か〕辞めると、同じ舎なら頼みやすいから次々頼んだりして。

若くして世話係、そして配給部長

〔昭和〕22年に人権闘争が起きる。そのときは、ぼくは世話係をやってたんですよ。「石楠花」と「白馬」と「吉野」の世話係。「石楠花」は女の舎で、「白

馬」は自分の〔いる〕男の舎で、「吉野」は女の不自由舎なの。その頃から〔患者作業として〕看護人〔をやる人〕がいなくて、世話係がそこの看護人をめっけなきゃならない。それがいないと、自分がそこへご飯食べさしに行かなきゃならない。大変な作業で、そういう不自由舎の世話係やってる連中が、みんな「なんとかしてくれ」って執行委員会と揉みあって、ガンガン言って追及（なに）したら、執行委員がみんな辞めちゃった。そのとき、独身者を中心に生活改善同盟というのができて。そういう連中が、じゃ、自分たちでやろうということになって、それで小川〔辰夫〕さんという人、その人は人格者で、その人が親方になってやろうって。そのときに、人数が足りないから、ぼくはまだ17ぐらいにしかならないのに〔年齢を〕誤魔化して、もう19だとかつって立候補したんですよ。そうすると、どういうわけだか、6番目にあがっちゃった。しょうがねえから、もうやらなきゃしょうがないと思って、配給部長というのをやった。

ララ物資が来たんだ、そのとき。公会堂へ〔物を〕みんな広げて、小川さんが——神戸〔高等〕商船〔学校〕を出てる人で、中国に3年もいて、姑娘（クーニャン）の奥さんまで持ってた人で、英語が達者なんです。その人が、これは何、これは何って、みんな仕分けしてくれて。それで、〔入所者〕1000人ぐらいの人数に、みんな区分けしたの。盗られちゃ大変だっていうんで、3人ぐらいでそこへ泊まって。それで籤引きつくって、それをみんな配給した覚えなんかもある。

〔ララ物資では〕いろんなものが来た。脱脂粉乳（ミルク）も来るし、煙草も来るし。服なんか、でかすぎてどうしようもない靴下から、ネクタイから、ワイシャツから、いろんなものが来ましたよ。落下傘みたいなものも来てね、それでワイシャツを作るなんて人もいたし。シーツの類も来たし。甘いものがない時代だから、脱脂粉乳（ミルク）なんかほんとと美味しくて。チョコレートなんかあったら大変なことになった。

〔どうしてそんなに若いのに世話係になったのか、だって？〕「やってくれ、やってくれ」って頼むんですよ。世話役の仕事というのが、はっきりしないんですよね。朝、ずうっと回って歩いて、みんなから頼まれたこと、手紙出してこいとか、医局を申し込んでこいとか、電球があれだから交換してこいとか〔頼まれる〕。その地区で〔患者が〕死ぬと、そこの世話係が火葬までさせられる。火葬やるという、自分でみんな幕を背負って行って、そこへ置いて。それで棺（かん）もみんな担いで行って、そこでやってたんですよ。世話係は、いい待遇じゃないですよ。不自由舎を持ってる世話係は大変だった。一つ地区が30人ぐらい。大きいところでは40人ぐらい。28、9人もいたから、世話係が。

昭和22年の人権闘争

〔昭和22年の人権闘争のとき、ぼくは〕まだ若かったから、実行委員じゃなかった。青年実行班。それで、東龍太郎だとかが厚生省から〔楽泉園に〕来たときに、職員を庇うような発言をして、患者がみんな怒って〔公会堂の患者と一般の人とを仕切る〕柵を乗り越えて、追っかけて、慌てて逃げたときに、〔ぼくは〕青年実行班で、「騒動事件を起こさないように〔無事に〕送っていけ」っていうんで、正門まで送ってったわけ。そのあとも、官舎に隠匿物資があるつって、青年実行班で官舎へ行ったことがある。〔そのときは隠匿物資は〕わ

かんなかった。だけど、〔共同〕風呂なんかも、官舎は男女別々なんだね。園内は一緒だけど。

〔発端は共産党の人たちが楽泉園にやって来た。〕真穂七（まさほなつ）さんとか山本俊五さんとか。すごく穏やかな、話のわかるような感じの人で。ぼくたち青年会で、炭小屋の横のカボチャの畑で草取りをした。そうしたら、そこへ通ってきて、「おまえたち、何してるんだ？」っていうから、「いや、こういうふうやってるんだ」ついたら、「おまえたち、患者さんだろ？」「そうだ」「患者がそんなことやるんか」「他の作業もみんなやってんだ」ついたら、「エエッ」なんてびっくりして。話してるうちに、重監房の話なんかも出たりして。「それはおかしい」つって。それで、執行委員の人たちと会って、「追及しなきゃダメだ。隠匿物資だっていっぱいあるわけだ」つって。

そのとき、霜崎〔清〕という人が庶務課長（じむかん）で、千葉の人なんだけど。古材をみんな持って行って、患者の大工をみんな連れて行って、何日も泊まって、自分の家（うち）を建てたりして。それで、〔家が〕できたお祝いだかなんだか、患者の人みんなに一握りずつピーナツをくれたんだよ。他にもいろいろ、終戦後だから外から物資が来てるんですけど。全然こっちにはそれがわからない。それ、みんな隠して、横流ししてるんじゃないかつって調べたら、そういう実態がわかってきた。そのときに、実行委員会ができて、藤田〔武一〕さんや大和〔武夫〕さんなんかが、それ追及したんだ。そのとき共産党の人も〔一緒に〕追及した。〔職員が〕舞台の上にいると、「なんで、おまえ、そんな高いところで偉そうにいるんだ！ 下りてこい！」「同じ立場で話せ！」とかなんとか言っつて。すごいこと言うなあと思って、びっくりしてたら、「こんなのは当たり前だ。同じ人間じゃないか」つって。

だから、そのときに急に、共産党のシンパができちゃって。うちの部屋の人も、クリスチャンなんだけど、すっかり感激（あれ）して、〔共産党の〕細胞を作っちゃった。山本俊五さんも何回もその部屋に来ましたよ。ぼくなんかも、「入れ、入れ」つうんで、一緒に入って、赤旗の歌を覚えたり、新聞読んだり、読書会やったりなんかしたんです。そのとき小川〔辰夫〕さんなんかも来て。それで、あの人〔昭和〕22年の〔執行部が〕辞職したあと〔総和会の会長に〕立候補して、執行委員〔会〕をつくったんですけど。

昭和25年の殺人事件

〔ぼくが楽泉園に入ったとき、園内に、すでに朝鮮人のグループが〕ありました。青山さんという人が会長（おやかた）だったと思ったな。終戦になって、朝連ができて。その分会長（いいんちょう）もその青山さんがやってたけど、その人が〔社会に〕出ちゃったんですよ。そのあと、やる人がいなくて、ぼくに「やれ、やれ」つて言われて。ぼくが自治会〔の執行部〕へ出たもんで、なんだかしらんけど、ぼくにおっつけられちゃった。『風雪の紋——栗生楽泉園患者50年史』（1982）では勘違いして、兼子保志（やすし）さん⁹が分会長（いいんちょう）をやったというふう書いてんだけど、兼子さんはその頃は大阪〔の実家〕へ帰っちゃってないんですよ。ぼくが〔分会長を〕ちょっとやったんだけど〔朝連は解散させられて、そのあとの「協親会」の〕会長を保志（ほし）さん¹⁰という人がやって。そのときに、あの殺人事件が起きたんですよ、〔昭和〕25年の。

〔保志さんの〕隣〔室〕が大山さん。これも朝鮮の人だけけど、仲が悪くて。その大山さんの療舎（ところ）へ、中岡という人と大和というのともう一人、3人の大阪から来たヤクザの人が入って、年中飲んで。それで隣のうちへ年中嫌がらせをして。独身舎の石山さんの部屋まで来て、冬、湯たんぽを沸かしているとき、その湯たんぽをバサッと短刀で刺したりして。みんな怖がってた。それで、「このままじゃ、どうしようもねえから、やっつけちゃえ」「集まれ、集まれ」つって、みんな集まったんですよ。それで、3人を追っかけた。天理教〔の教会〕へ隠れてたやつを〔引っ張り出して〕、あの売店のそばで〔やっつけて〕。1人は分館の中へ逃げた。そうしたら、消防団が鳶口を持ってきて。岡〔一郎〕さん¹¹が「〔命は〕助けてやれ」つって言ったんだけど、「助けたら、あとで火を点けられて、みんな、焼き殺されるぞ。やっちゃわなきゃダメだ」つうんで、みんなで引っ張りだして、叩いて殺しちゃったわけですよ。

そのときにまわりで見てた人が、誰がいた、誰がいたつて、目立った人が結局、名指しされて。職員も見てたから、「あの人がいた。この人がいた」つて言われた数の多い人が、犯人みたいにされちゃつて。その裁判が〔園内の〕公会堂（あすこ）であつたんですよ¹²。

〔あの事件で殺された人は〕中岡さん〔だけが朝鮮人〕。大和は違うし〔もう一人も〕違う。〔その3人というのはずいぶんワルだったか、ですつて？〕いやあ、ぼくにはそんなことなかった。詰基なんかもやったことがあるんだけど、ぼくにはいつも丁寧だったけど。ほかの連中には、すごく。小林松太郎といつて、片っぽだけで肥桶を二人分、四貫〔担いじゃうような〕そのぐらい腕〔つぶし〕の強い人がいたんだけど、その大和にかかったら、コンクリートに叩きつけられたつていうんだよ。〔大和は〕そのぐらい腕力が強かった人なんだけど。そのときに、大山さんというのと宮武というのは、その仲間だもんだから、園から逃げちゃつた。宮武は駿河〔療養所〕へ逃げて、大山さんは全生園（こち）へ入つたんだ。ほんと、えらい事件だった。

だけど、あれも、正しく書かれてない、『風雪の紋』では。ほんとの実態は、あんなもんじゃないんだよ。

あのとき、岡さんは立派だつたですよ。岡さんは〔静止しようつと精〕一杯、怒鳴つたけど、まわりがもう、消防団の人がとくに、鳶口を持って飛び込んで行つて、「引っ張りだせえ」なんつって。朝鮮の人は、そんな元気な人は2、3人ぐらいしかいなかった。

二人の金本（奉玉と相権）

〔奉玉さんはぼくより〕先に〔楽泉園に〕来た。〔昭和〕19年。1年早いんですよ。むこうは大正15年〔生まれ〕です。〔ぼくより〕兄貴だな。〔威張られることは〕あんまり〔なかった〕。だけど、利用された。彼は医局の受付して、看護婦にももてたし。それで、看護婦と仲良くなつて。ぼくは450円で買って四畳半へ入つたんさ。それで、彼は独身舎へいたもんだから、「部屋を貸してくれ」つって、その看護婦と二人、部屋を貸してやったこともあるし。それで、彼（じぶん）のきょうだい草津の町へ来たときに、大阪屋という、いまは立派な温泉〔旅館〕だけけど、〔当時は〕ぼろ家。そこへ〔泊まつた〕。寒くて〔かなわないというので〕、炭を園から背負つて持つて行つたこともある。助けたことはいっぱいありますが、助けられたことはあんまりない（笑）。全生園（こ

こへ入ってからはね、世話になったけど。——いちばん古い付き合いですよ。
〔昭和〕20年から知ってる友達は、そうはいない。

芝居をとおしての壮健者たちとの交流

〔昭和20年8月15日の敗戦の報は〕病棟で聞きましたね。足の傷が悪くて病棟へ入っていて。病棟で一台しかないラジオ、四球スーパーで、ピーピーピーピー鳴るのを、みんなで囲んで、それで天皇の放送を聞いて。よくわかんなかったら、誰かが「負けたんだ、負けたんだ」なんつって。ワーワー騒ぎだして。戦争が終わったということでホッと〔した〕という感じもしなかったけど、ああ、負けたのかなと。これで戦争はないんだな、もう空襲はないんだなということだけはわかったけど。

ぼくは、草津へ行って戦争が終わったら、急にのびのびしたのか、ずいぶんいろんなことを経験した。〔ぼくが〕落語をやったというの、いまだに知っている人は知ってるけど。〔昭和〕22年頃だったかな、青年会で演芸会をやったときに、「落語、やれ、やれ」つうんで、着物を貸してもらって、座布団2枚重ねて、その上へ乗っかって、「桃太郎」っていう落語をやった。ラジオ聞いたり本を読んだりして、真似たんだけどね。〔ぼくは〕子どものときに、エノケンの芝居を観てるんですよ。「らくだの馬さん」観てる。新国劇の島田正吾の「一本刀土俵入」も観てる。錦糸町の江東劇場で観てるんですよ。そばに大正館という映画館があって、三本立てが5銭ぐらいで入れた。木下サーカスだ、シバタサーカスだ、〔江東〕楽天地に来て、それを観に行っただけでもあります。面白いこと、なんでも興味もって、そういうものが好きだったから。

〔楽泉園では芝居にも〕けっこう打ち込みましたよ。最初は〔役者は〕ぜんぶ男で、女形をやらされたんです。それも、矢場の女だと、台詞が「いらっしゃーい」「アタリー」なんてのが3つぐらいしかないような役だった。写真あるけど、けっこう、いい女になってる（笑）。その次から「女の人を入れようや」つうんで、看護婦さんや職員に声をかけたら、みんな入ってくれて。八重ちゃん¹³も入ってくれて。八重ちゃんは分館にいて、ぼくが配給部長やっていると、その配給の係をやったから、知り合いになって。八重ちゃんも『平和』¹⁴っていう雑誌（ほん）を読んで。読むとぼくのところへ持ってきてくれた。外丸さんという〔八重ちゃんと〕一緒になった、共産党の市議会議員やった人が中之条の人だったんですよ。それで、中之条の青年団と草津の青年団と楽泉園（うち）の青年団（ほう）と3つで、楽泉園で芝居をやったことがある、合同で。のど自慢もやりましたよ。そのときちょうど、ぼく、文化部長で、挨拶した覚えがある。のど自慢大会では、入園者の金平さんという人が一位になった。審査員は、歯科の先生とか町の音楽の偉い人だったんですけど、長野原から来た人が、自分が優勝すると思って〔賞品に〕酒を持ってきてただけど、〔自分が〕なれなかったもんで、酒持って帰っちゃった（笑）。

それで、三木鶏郎の「冗談音楽」というのが、あの時分あって、面白くて。それを真似して、青年会でコントを作っちゃあ、〔園内放送で〕音楽を流しちゃあ、冗談を言って、笑わしていた。けっこう楽しかったですよ。

〔さっき言った四畳半の部屋を買ったのは〕下の自由地区じゃなくて、上地区です。あそこで売ってる舎があったんですよ、慰安会で。ぼくが入った「飯豊（いいで）舎」の6部屋は、みんな、お金で買った部屋。端っこのほうの「岩

木」「岩手」の部屋も売ってた。兼子〔保志〕さんも買って入りました、一時。

〔そんなお金があったのか、ですって?〕作業でもらったやつを使わないで、貯めてた。買うものもないし。〔金は〕使わないと貯まる。ぼくは身延〔深敬園〕へ行くときに2万5千円ぐらいありました、当時のお金で。当時、兼子さんに1万〔円〕貸したことがあるんだよ。〔彼が〕大阪へ行くときに。いまの金にしたら、けっこう大きい。

当時はね、在のおばあさんたちが町へ野菜を売りに行って、裏の道を通る。ぼくがいるところのすぐ裏が道。それで、うちの舎の人のところへ来て、「お茶、いっぱいくれや」なんつって、お茶飲んで。〔在の人たちは差別意識って〕なかったですよ。園の芝居をみんな観に来てたんですよ。

それで、花敷の青年会が芝居やるつうんで、うちへ幕と緞帳と鬘とかを「貸してくれ」って来て、貸したことがある。それで招待されたんですよ。〔昼の〕1時からやるって、6人ぐらいで観に行ったら、全然始まる気〔配〕がなくて。待ってたら、栗の赤飯くれて美味しかった。夜7時半ごろ始まって、終わったら夜中の1時頃ですよ。そうしたら、雨が降ってきちゃって、「これは困ったなあ」「じゃ、幕だけ持って帰ろう」って、みんな、畳だ幕の下へ入って、そのまま担いで、花敷から楽泉園まで帰ってきたですよ。若いときだから、元氣だったんだなあ。暮坂へも歩いてきました。秋に風が吹くと、「ああ、落ちてるぞ。落ちてるぞ」って栗拾いに行くんですよ。

身延深敬園の独自の役割

それと、〔地元出身の参議院議員の〕山本富雄さん。〔第二次海部内閣のときに〕農林水産大臣をやった人ですけど。その人と〔社会党の書記長をやった〕山口鶴男さんがいるでしょ。山口鶴男さんが中之条高校の化学（ばけがく）の先生だったときに、山本富雄さんは町の〔旅館の〕主人で、新聞屋もやってた。その二人が来て、自治会〔室〕で朝まで喋ったことがあるんですよ、いろんな問題で。「ぼくは、あのとき軍国主義だったけど、もう、神様仏様はいっさい信じないことにしてるんだ」つったら、「へえー」なんて富雄さんに〔言われて〕。それで、栗田さんが看護婦と仲良くなって〔一緒になれないのなら〕死ぬつって野尻湖のほうへ行ったら、野尻湖まで追っかけて行ったんです、4人で。「死なないでくれ」つったら、短刀を〔彼女の〕胸へ突きつけて、「これ以上来たら、突くぞ。帰れ！ 帰れ！」つうんで、仕方なしに「生きるだけ生きてくれ」つって帰ってきたら、その晩、一晩中、湯川を伝って〔草津の〕町まで来て、富雄さんの旅館（うち）へ泊まって、あくる朝、連絡をし〔てき〕たんで、また飛んで行ったら、「これから身延へ行く」と。身延の深敬園。あそこは、方々の療養所から、壮健さんと一緒に駆け落ちする人が多かったんですよ。看護婦さんやなんかと仲良くなった人が、身延へ行くと入れてもらえた。そこへ栗田さんが行ったときに、兼子〔保志〕さんやぼくたちは知り合いからカンパを集めて、旅費に持たした。

身延深敬園（あそこ）は〔日蓮宗という〕宗教の病院だけど、キリスト教の人でもなんでも入れたんですよ。〔カトリックの〕待労院や神山復生病院じゃ、信者以外は絶対ダメだし。男と女は別々。全生園（ここ）にも、待労院や神山から逃げてきた人が何人もいます。身延は、付いてくると、子どもまで入れたんですよ。〔あるいは〕子どもが病気になったら、博労やってたおじいちゃんが

子どもと一緒にそこに入って。そのおじいちゃんは元気だから、年中、うちへ帰って行って、ろくに園にいないで、ときどき来てるだけだったけど。そういう人も認めてたし。それで、出るっていえば、いつでも出したし。ぼくが行ったときも、壮健の看護婦やなんかと一緒に来た人が6、7人いたかな。あそこはみんな個室ですよ。二階建ての〔一階二階合わせて〕8つの部屋はみんな夫婦舎だったし。〔そのための運営費は〕網脇龍妙が〔十萬〕一厘講〔勸募活動〕つって、〔少額の〕寄付を何十万人の人に呼び掛けたんですよ。中の仕事はみんな患者さんがやるんですよ。石垣を積むのもやるし。ぼくたちが行ったのは〔昭和〕33年だけ。伊勢湾台風があったんですよ。橋が流れ、土手が崩れちゃった。そのときに杉の木を倒して、こんなでっかい丸太を〔橋代わりに渡して〕、それを伝って食料を運んだりした。川の中へみんな患者さんが入って、そういう仕事をしたんだ。国立の療養所〔と比べて〕、どっちかっていえば私立の〔深敬園のほうが〕仕事はきつかったですね。だけどもあ、楽しい面もあった。こまんじり(ママ)してたから、一緒に餅搗きやったり、盆踊りやったり、バトミントンやったりして、団欒(なに)したけど。

〔身延深敬園は〕いまは、障害者施設になってる。跡を継いでやってる人がまた変わり者で、外部(ほか)の人をいっさい入れない。とくにハンセンの人が来ると、みんな断る。それで、〔身延からちょっと北の〕下部(しもべ)〔温泉〕で全国の曹洞宗の人が集会をして、ぼくが講演に行ったんです。それで〔何人かで〕身延へお参りに行った。何度ベルを押しても出てこないから、自分たちが勝手にお墓を掃除して、花を上げようと思ったら、水道をみんな締めちゃって水道も出ない。お墓が草だらけで荒れちゃった。だから、「まったく、ひどい坊さんだなあ」なんつって。

早い話、駆け落ちで身延深敬園へ

〔昭和33年に身延深敬園へ行ったのは〕早い話、駆け落ちですね。〔家内は〕昭和16年に、秋田から強制収容で〔栗生楽泉園に〕入ってるんです。

当時は〔新入患者は〕収容病棟へ入って、そこで何週間も泊まって検査してから舎に下がるんだけど、うちの家内(かあちゃん)は〔そこで〕みんなの世話をして、偽名まで付けてやってた。目の見えない弟がいて、笹川佐之(さの)つって、金夏(キムハイル)¹⁵だとか浅井あいさん¹⁶だとかみんな仲間で、舌読をいちばん最初やった〔人たち〕。その弟が、もう治らないガンだったので、自分が目の見えたときに在のほうに遊びに行った覚えがあるから、小雨(こさめ)のほうまで行って、橋のところで待ってて。バスのプープーって音を聞いてから〔バスに〕飛び込んじゃった。バスの運転手から連絡があって、消防団やなんかみんなで担いで帰ってきて火葬した。それで、うちのかあちゃんがガックリしちゃって。旦那がいたんだけど、その人と別れたんですよ。それで、楽泉園(そこ)には元の旦那がいるし、ほかの人の目(あれ)もあるし、かあちゃんも弟がそこで自殺したし〔ということで、二人で〕他〔の療養所〕へ行こうつって、熊本〔の菊池恵楓園〕へ行く予定だったんだ。だけど、その前に〔身延に寄って〕栗田さんに一回会って行こうつって行ったら、寂しがって手を離さない。「ここにいろ、ここにいろ」って。それで、とうとう、深敬園(そこ)へ居ついちゃった。行ったのが〔昭和33年の〕7月で、〔昭和〕39年の4月までいましたからね。6年ぐらいいたんですよ。そのあいだに、いろんな経

験をして。鋸(のこ)の目立てまでした。売店〔の仕事〕もした。売店つたって、ちっちゃい売店で、〔店を開けるのは〕午前中2時間ぐらい。外から来る業者からお菓子を預かったり、いろいろなもの買ってきてもらって、ちょこちょこっと売ただけだから、たいしたことない。

ぼくたちがいたときは、〔深敬園には〕55人ぐらいいたかなあ。ずうっと坂で、平らなところはほとんどない。午後2時頃になると日が陰っちゃって。冬なんか、ほんとに寒いですよ。〔だけど〕上まで上がって行って見たら、わらび、ぜんまい、うど、なんてのがいっぱいあって、だれも採る人がいなかったですよ。ぼくが草津で採ってたから採ったら、みんな、「食えるんか?」「なに言ってんだ。こんな美味しいものはない」つって。それからみんな採るようになったけど。椎茸小屋が上にあって、熊も通るんですよ。

〔身延深敬園では〕朝昼晩、お勤めがあります。ぼくはお昼をときどき行って、朝晩は行かないでいた。昼は本堂で職員も一緒に〔お経を〕あげて、朝晩は別なところであげるんです。ところが、職員の6歳ぐらいの女の子が、いい声で、朗々とお経をあげるんで、びっくりしちゃって。習わぬ経って、ほんとにあれだなと思って。ぼくも、通ってるうちに、信者でもないんだけど、いつのまにかお経を覚えちゃいましたよ。それで、信行(しんぎょう)道場というのがすぐ〔近く〕にあって、冬に水垢離やるんですよ、全国から来て。朝暗いうちから、「ハァー」って、でかい声が聞こえる。朝早くから本山に登る連中がいっぱいいて、「南無妙法蓮華経」っていうのが音楽みたいに聞こえるし。

〔身延では〕葉は、全然飲んだことないです。身延じゃ、外科〔の治療を受けたこと〕もなかった。ただ、草津にいるときにね、一回、作業中に上から飛び降りたら、釘を踏んで、足、突き抜けちゃって。その足の傷がリンパ腺でグリーンへ入っちゃって、腰(こ)が化膿しちゃった。小林〔茂信〕先生が、たった一人で、「いまから手術するから、入れ」つて。〔手術が終わったら〕「病室へ入るか、どうするか?」つうから、「いや、入りたくない。〔部屋へ〕帰る」「そうか、じゃ、帰れ」。痛い足を引きずって、1時間以上かかって部屋へやっとなり帰って。1週間ぐらいじいっと寝てて。それが治ってからは、傷、全然できない。小林先生も、軍医だから、けっこう大雑把なところがあつたんじゃないかと思う。

あつというまに素人本因坊

あの先生も、碁を一生懸命やっててね。ぼくも一回〔小林〕先生と打って。「なんで負けてやらない」なんて怒られた。ぼくは、昭和29年に初段をもらったんですよ。坊さんですごく強い2段の人がいて、その人に習った。3級のときにその人が死んじゃって。その人が〔栗生楽泉園日本棋院支部の〕6期まで素人本因坊だった。7期のやつをやるのに、みんなでやったら、ぼくと保志(ほし)さんと二人が残って。保志さんは1級で、ぼくは3級なんだ。みんな、ぼくの応援をするんですよ。やったら、4連勝しちゃって、ぼくが7期の本因坊になっちゃった。日本棋院から岩本薫さんが来て、初段の免状をもらった。

〔でも〕碁を打つ暇(ま)がなくて。他にやりたいことがいっぱいあって。全生園(こ)へ来てすぐ3段まで行ったけど、それっきり打ってない。面白いのは面白いけど、時間ももったいない。あれやったら、ほかのことがなにもできなくなる。時間があつたら本を読んだほうがいいかなと。

多磨全生園へ転園し、全患協本部で働く

〔結局〕熊本は行かないで、〔昭和〕39年4月に全生園（ここ）へ来た。そうしたら、9月に全患協の本部が長島から多磨へ移ったんですよ。「本部へ出てくれ」って言われちゃって。当時は中執制じゃないから、光岡〔良二〕さんが事務局長で、水沢さんが総務部長、ぼくが渉外部長。大竹〔章〕さんが情宣部長で新聞をつくった。〔昭和〕42年から中執制になって、おれたちはそのまま補佐で残った。新聞を大竹さんが辞めて、ぼくが6年半ぐらい『全患協ニュース』を担当したんですよ。

〔全生園に移ってきたときは〕まだ〔患者が〕いっぱいいて、ぼくたちの入る部屋がなくて、不自由舎の看護をするという条件で〔付添看護人の部屋をもらった〕。両隣が夫婦者の目の見えない人だった。うちのかあちゃん、〔昭和〕46年まで看護をやってた。いまの職員と違って、休みがない。朝でも昼でも夜でも、用があればいつでも飛んで行く。湯沸かし器はないし、掃除機はないし、なんにもない。七輪でパタパタやって〔湯を沸かす〕。昔の看護は大変だったよ。それで、風が吹くと、廊下は靴の跡がポコポコ付くぐらい砂が溜まったし。いまはサッシでそんなこともないけど、当時はひどかったですね。

〔全患協本部に出るようになったら〕外部のいろんな団体と付き合うようになった。全視協（全日本視覚障害者協議会）だとかね。日患同盟（日本患者同盟）とは前からやってきてますけど。朝日訴訟の運動なんかも担当してたから、総評会館で司法対策委員会っていう会合があつて。長宏（おさひろし）さんとか古川〔圭助〕さんとか、そういう人たちと年中会つて。〔昭和42年に〕最高裁で〔朝日訴訟の〕判決出るときは徹夜して並んで、傍聴もしたんですよ。メーデーにも一回行ったことがありますよ、全患協本部で。

やっぱり、自分たちだけじゃダメだな、いろんな人たちと一緒にやらなきゃダメだ、と。障全協（障害者の生活と権利を守る全国連絡協議会）という団体が、教育会館で総会をやったときも行きましたし。沢村貞子の姉さんだった矢島せい子さんという人が〔初代〕会長だったんですよ。それで、『全患協運動史』を書くときに、いろいろ資料をもらうつうんで、矢島せい子さんの自宅（うち）まで行きました。その旦那さんがまた立派な先生で、部屋へ行ったら、びっくり。部屋がもう本棚ばかりなんですよ。

〔ぼくは全患協本部での仕事は昭和〕48年までやった。〔昭和〕46年に自用費というかたちで、〔障害〕年金をもらえない人もみんな、年金と同額の給与金が出るようになったんです。それからようやく園内が落ち着くようになった。ぼくは〔昭和〕48年に辞めてから、1年間、労務外出したんです。都心で7階建てのマンションを造る。〔それに〕穴掘りから出来上がるまで行ってたんですよ。テレビが欲しい、扇風機が欲しいというような時代で、夜7時半頃まで、狭いエレベーターの中のパネルをコンクリから外す仕事で、くたくたになって。いまは〔体重が〕66.5ぐらいありますけど、当時は50キロそこそこだった。目ばかりギョロギョロして。帰ってきたら、「明日は〔園内の〕炊事の屋根が壊れたからその仕事をしろ」つうんで、下請けの日昭電気の人たちと一緒にやってたら、それっきりわかんなくなって、目が覚めたらベッドの上なんですよ。「あれ、なんで、おれ、ここにいる？」「なに言ってんだ。おまえ、今日は4日目だ。おまえ、屋根から真っ逆さまに落ちて、耳から鼻から口

から血がボコボコ出て。担架が血だらけで、顔がお化けみたいに腫れてた。今日、目が覚めなきゃ助からないって。よく助かった」。そのときの後遺症で右目が見えなくなっちゃった。視神経が切れちゃった。10年ぐらいは、昼間も頭が痛くて、昼間30分ぐらい寝てましたけど。いま、ようやく、こうなってる。

『全患協運動史』『俱会一処』の編纂、そして資料館づくり

〔あのときは〕草津へ行って、1ヵ月ぐらい温泉へ入って、ゆっくり静養したんですよ。それで帰ってきてよくなってきたら、『全患協運動史』（1977）の編纂やれと。光岡〔良二〕さんと盾木〔弘〕さんと氷上〔恵介〕さんと大竹さんと私と5人で、2年間かかってやって。それを終わったら、こんどは、同じメンバーで『俱会一処』（1979）をやれっていうんで、またやって。それ終わって、やっとホッとしたなと思ったら、こんどはまたすぐに、資料館¹⁷を造るからっていうんで、平成3年頃からずうっと、大竹さんとまた一緒に組んでやるようになった。

〔初代館長を務めた〕大谷〔藤郎〕先生は「もう2、3年ほっといて、〔ゆっくり〕資料を集めればいい」という感じだったけど、ぼくたちは「資料館ができたなら、すぐに開かなきゃおかしい」つうんで、自分たちでどんどん実行委員会を作って、もうやるんだって言ったら、大谷先生も「じゃあ、そうしてくれるか。二人で全国を回ってくれ」つうんで、全国の療養所をみんな回ったんですよ。青森〔の松丘保養園〕から始めたんだけど、青森の面宿（面会人宿泊所）で泊まったときは、「これから先、どうなるんだろう。どうしたらいいだろう」って話し込んだら、眠れなくなっちゃって。

そのほか、奈良にも行った。「北山十八間戸」だとか、お寺がたくさんハンセンに関係してたから。〔長島愛生園の〕宇佐美〔治〕さんと一緒に行ったです。奈良の「交流（むすび）の家」も行ったし。藤沢市の〔時宗総本山の〕遊行寺にも行ったし。それから、この周りのいろんな博物館、資料館も12、3ヵ所まわりましたよ。みんな、どんな展示をするかっていうので。

3度、死に損なった

なんせ、いい経験ですよ。こんな経験、めったにできるもんじゃない。よく、こんないろんな経験をさしてもらえたなと思って、逆に感謝する気持ちだし。それで、3回死に損なった。自分で死にたいと思ったのが、草津へ行ったときに、もう、よっぽど疲れちゃって、腹減って、谷底へ飛び込みたと思ったけど。〔それは別として〕空襲で1回目、死に損なったでしょ。2回目は、屋根から落ちて意識不明になって。3回目は、1999年に全日空のハイジャックに遭っちゃった。女房（かあちゃん）の姪っこが北海道にいて、呼ばれて行ったら、ハイジャックに遭った。「富士山が見えるぞ」なんて言うから、おかしい。「北海道へ行くのに、なんで富士山が見えるんだ」。〔上空を〕グルグル回ってたんですよ。そうしたら、「この飛行機はハイジャックされました。みなさん、落ち着いてください」なんて〔放送があって〕。そのうちに、「このなかにお医者さまはいませんか？」って言ったら、後ろからパーッと飛んでいった人がいた。そのうちに、飛行機がガガッと下がっちゃったんですよ。ああ、もうダメなんだなと思ったら、またガーッと上へ上がっていった。そのうちに「犯人が捕まりました」。それまで全然声ひとつでなかったのが、一斉にウワーって拍手が

起きて。[あのときは] 機長が刺されて死んだんですよ。[犯人は]「橋の下をくぐれ」なんて言う頭の変な男だったんだけど。それで捕まって、羽田へまた引返して。350人ぐらい乗ってたんだけど、警官がいっぱい来て、一人ひとり、「どこへ、どういう用事で行くんだ」とかって聞いて。100人ぐらいの人が、もう乗るのを止めちゃった。ぼくたちは4時間ぐらい遅れて〔千歳空港に〕夜着いたら、報道陣がいっぱいいるんだよ。「ここはダメだから」つうんで、職員の部屋を抜けて、裏のほうを歩いて〔外に出た〕。3回も死に損なったから、私は運よく助かったなあと思って。

気が緩んだらリュウマチに

それが、いま、リュウマチをやって。2年前から。それまで資料館、9年間はずうっと、学芸員も司書も1人もなくて、自分たちで全部やってたんだけど。9年目からは、学芸員が1人、2人入って。それで、国立になった途端に、気が緩んだのか、リュウマチになっちゃったわけ。朝晩、11枚ずつ湿布して、薬を飲んでいたけども、冷えるから、こんど、夜は貼らないで、軟膏だけ塗って。夜中に4回ぐらい目が覚めるんですよ。そうすると、軟膏を塗ったりして。朝まで我慢して。昼間は気が紛れてるから、大丈夫なんですよ。夜、じっとしていると、痛くてたまらない。

〔平成〕19年から国立になったんですけど、その前は、一切合切ぜんぶやっただですよ。話はするし、二階（うえ）〔の展示場〕は案内ぜんぶするし。シンポジウム、企画展もぜんぶ自分たちで考えてやるし。新聞だすのもぜんぶだし。それで、毎月の運営委員会もぼくが議題を書いて説明して。それ全部やってたのがみんななくなって。途端に気が緩んじやったのかなんか。〔前は〕風邪ひとつ引かなかったですよ。それで、ちょっと手帳を調べてみたら、6年前、一年間で、まるまる一日休めたのは29日しかない。土曜日曜は自治会は休みだけど、資料館（こっち）は月曜と祭日の翌日しか休みがない。年末年始と、祭日の翌日の休みじゃなきゃ休めない。これじゃ体がもたないと思って、最近ではできるだけ休むようにしてるんですけど。

休みの日だって、沖縄から来たとか、外国の人が来たとかつって、「休みでも開けてくれ」なんつって。鍵を持って、開けたり閉めたりするの、ほとんどぼくがやってたし。掃除までしてたんですよ、前は。休みの日に自分たちでみんな掃除。二階はぼく一人で、掃除機をかけて、雑巾掛けもぜんぶやって。下はみんなやってた。

〔全生園での自治会の役員は昭和〕57年から、もう切れ目なしですね。最初は福祉〔担当〕で入って、総務をやったり、医療〔の担当〕をやったり。で、副会長が長いですよ。森元〔美代治〕さん〔が会長〕のときも、平沢〔保治〕さん〔が会長〕のときもずうっと副会長で。〔平沢さんが病気になって会長職が務まらなくなって〕しょうがねえから〔会長を〕やるようになった。どこ〔の療養所の自治会〕も〔会長の〕やり手がなくて困ってますよ、ほんとに。

自用費が出るまでは国籍で差別

〔ハンセン病療養所でも、在日韓国人は国籍が日本じゃないというんで冷遇された時代が〕ありました。〔自用費が出るようになった昭和〕46年の前は、元気な人は日本の元気な人も一緒だからいいんだけど、〔日本国籍をもたない〕

不自由な人、目の見えない人が〔もらえる金が〕非常に少なく。片っぼうは〔月に〕1500円もらってるのに、片っぼうは100円か200円。〔障害〕年金があがるごとに、だんだんその差が広がって。当時はまだ雑居部屋だったから、年金が出るときは、「今日はお汁粉会をやろう」というと、もう隠れるようにして、用もないのに外を歩き回ったり、トイレへ行ったりしていたんですね。それで、来月から200円あげると約束したのが、中止だなんて一回言われたことがあって、みんなで座り込みをやるつって大騒ぎになったことがある。そのときはうちの園長が〔厚生省に〕行って掛け合って、元に戻すというんで〔座り込みは〕止めたけど。その頃はちょっと差があって、たしかにひどかったんだけど。まあ、その後、自費が出るようになってからは、みんな同じになったんで、落ち着いて。労務外出も自然に減っちゃったんですよ。まあ、やっぱり、お金の面で、そういう惨めな目に遭うなんていうのは、ほんと情けない話だけど。やっぱり堪（こた）えるんですね、不自由な人はとくに。

自前で園内の整備をしてきた

全生園（ここ）も労務外出、多かったですよ。50人ぐらい出てたんじゃないですかね。だけど、ここが〔他の療養所と〕ちょっと違うのは、そういう労務外出した人から、お金を出してもらったの。「あんたたちは他の人たちよりもいい給料を取ってるんだから、すこし納めてくれ」って。それで〔園内の〕道路を舗装したんですね。神社通りも1千万以上かかったんですが、あれも豚舎を止めたときに、そのお金を分けなくて、それで舗装したんですよ。その道路がいちばん古いんだけど、いまでも傷んでない。最初の納骨堂も、ぜんぶ自分たちの手で造った。後の納骨堂は、ぼくが〔自治会の〕副支部長をやっているときに、カンパを3600万円集めて建てたんですよ。四阿（あずまや）を造ったのも、自分たちの寄付なんですよ。朝鮮の人が2人亡くなって、家族がいなくて、そのお金をもらって建てた。面宿でも、福祉会館でも、厚生会館でも、自治会事務所でも、そういう建物はみんな、船舶振興会や競輪協会から〔お金を〕もらって、3分の1は自治会が出して、建てたんですよ。お寺や教会もぜんぶそうですよ。国の建物じゃないですよ。〔自分たちで〕建てて、国にみんな寄付してるわけです。うちはとくに公園をいっぱい造った。矢嶋公園だの、新井公園だとか、村上梅林だとか、成田庭苑だとか、そういうのぜんぶ自分たちの金で造ってる。全療協〔事務局長〕の神（こう）〔美知宏〕さんが「ここは寄付が多いな。不思議なとこだな」と言ったけど。うちは必ず、88〔の祝い〕だとか、亡くなったというとき、自治会へみんな寄付する。〔入所者が亡くなって葬式に〕家族が来て、「500万ぐらいあるから持って帰ってくれ」って言うとき、「いや、これは、みなさんが使ってください」つって寄付してくれたりね。花火代を大きくくれる人もいるし

〔花火大会は〕南門を入った右側の広場でやるんですよ。けっこう〔近隣の人が〕楽しみにしてくれて、3000人から4000人ぐらい〔見に来ます〕。そこ、都立の病院が潰れて、その跡に300戸ぐらいの団地ができて、その連中が道路へ墓を敷いちゃって、明るいうちから待ってるんだよ。

菜の花を植えるでしょ。まわりの人がみんな来て、菜の花、摘んでいっちゃうんですよ。美味しいからつって。梅〔の実〕は、最近では年取ってあんまり漬ける人がいないから、外の人に開放してる。筍なんかでも、勝手に採りにきて

る人がけっこういるんですよ。

園内の人間関係では際立った民族差別はなかった

〔在日韓国入居者としての差別？ さっき言った年金の〕処遇問題ではあったけど、この中で直接、ひどい差別はなかったと思う。外〔の社会で〕はけっこうあると思うんだけど、この療養所の中は昔から一緒にいたし、一緒に同じ作業をやっていたし。とくに韓国人の人は土方仕事だとか、農作業だとか、豚舎だとか、そういうきつい作業をやっている人が多かったし。まあ、陰で言うのはどうか知らんけど。〔韓国人の〕なかには、けっこう訳のわからない人もいるから、喧嘩したりする人もいるから、そういう面じゃ嫌われる面もあるけど。それはまあ、日本人でもそういう人はいるし。とくに際立ってということはないと思う。

豚舎は、ぼくは出たことはない。だけど、草津で世話人だったときは、鶏を処理したり、牛を殺したこともある。牛の4本の足にこんな太い縄を〔縛って〕、一つの足〔の縄〕を2人か3人ずつで持って、それで脳天をパーンと叩くんですよ。うまく叩くとイッパツでコロッといくんだけど、はずれると暴れる。ちょっと外したもんだから、暴れて、みんな引っ張られて。こんだ、うまくパーンと叩いて。そうしたら喉を刺して、血をバケツにいっぱい取る。その血をもらうんですよ。それを固めて、食べると栄養になるんだとかって。

〔それと〕草津（あすこ）は、漬物の〔大きな〕樽があるんですよ。それを地下に埋めて。そこへタクワンを漬けるときには、干した大根を炊事で買いつけて、それを世話係が梯子で〔樽の底に〕入れて、塩を撒いて、小糠を撒いて、また大根を入れて。世話係というのは、そういう作業もしましたよ。

すべての始まりは資料館の開設

〔ハンセン病に対する社会的まなざしの変化をもたらした要因？〕ぼくは〔19〕93年の〔ハンセン病〕資料館の開設がいちばんだと思う。これができたから、その3年後に予防法廃止が起きたし、裁判が起きて2001年の熊本判決〔につながった〕。資料館ができたことによって、国会議員も弁護士もみんな何回も来て、『全患協運動史』やいろんな資料をこっから買っていった。

〔それまでは〕家族も、患者そのものも、職員も、ハンセン病のことは、なるべく隠そう隠そう〔としていた〕。退院した人なんかとくにそうだ。冬〔敏之〕君なんか、〔ハンセン病のことが〕ちょっとでもテレビに出るとすぐ飛んでいって、「そんなもの引っ込めろ」とかつって〔抗議してた〕。資料館ができてから、それじゃ、いつまで経っても啓発はできない、事実は事実として語り継いでいく〔ことが大事だと〕。ハンセン病〔問題〕の実態を知ってもらうことが、だんだんだんだん広まっていって、「らい予防法」廃止の運動も〔現実のものになっていった〕。駿河の西村〔時夫〕¹⁸君だとか、長島だとか奄美〔の自治会〕は、みんな予防法廃止に反対だったんですよ。草津で〔全患協の〕支部長〕会議をやったとき、厚生省に下条〔進一郎〕大臣に会いに行ったけど、長島はそのまま帰っちゃったんだよ。ぼくたちは行って、テレビにも出たりしたんだけど。そういう時代。——それで、廃止になった途端に、みんな肩組んで〔長島大〕橋に並んで、「ぼくたちが廃止したんだ」と。どの顔でそんなこと言えるんだっていう感じなんだけど。もう、そんなことには拘らない。

だけど、この資料館ができたのも、大谷先生〔のおかげだし〕。大谷先生が「らい予防法」廃止〔を提言する〕個人的見解を出して、それが〔国立ハンセン病療養所〕所長連盟だとか、ハンセン病学会だとか、東久留米の市議会だとか、真宗大谷派だとか、いろんなところから認められるようになって、ああいう大騒ぎになったわけです。予防法廃止のあと、裁判になって、判決が出た直後に〔控訴断念を求めて〕小泉首相（さん）と会った途端に、またマスコミがワーッと〔報道〕。〔元患者の〕顔がズラッとテレビに出るようになったもんだから、いっぺんに有名になっちゃったんだけど。

〔1998年に熊本地裁で国賠訴訟が始まったときは〕ぼくは熊本まで行ったんですよ。〔弁護団共同代表の〕徳田〔靖之〕先生なんかとも、一緒に馬刺しを食って、話し合いをして。「なんで、佐川さん、〔原告団に〕入らないですか。入って、東で頑張ってくださいよ」なんて言われた。だけど、「自治会の〔副会長という〕立場もあるし、資料館のほうもあって、ちょっといまんとこ入れないけど、応援はしてますよ」って言った。そのうちに「どうしても入ってくれ」つうんで、判決が出る以前の774人かなんかの〔原告の〕中には平沢さんもぼくも入ってるんですよ。

予防法〔廃止〕が一つの大きな節目であるし、資料館ができたのが大きな節目。〔それである程度は〕解放はされたけど、ハンセン病に対する尊厳回復とか名誉回復にはなってなかった。裁判になって、はじめて名誉回復がされたわけですよ。だから、島比呂志さんが資料館（ここ）へすぐ手紙を寄越して、「大谷先生の銅像を建ててくれ」と。この資料館が建ったということが、予防法廃止〔に向けて〕の大谷先生の決意をもたらした大きな原因だと思うんですよ。

なんでも隠すということはよくない。やっぱり、無知がこういう偏見差別を長引かせた原因だと思います。ぼくは〔ここの資料館で〕語り部をやるとき、「無知はいちばんいけない。日本のハンセン病〔問題〕がこういう状態になったのは、国の政策が一つあるし、もう一つは無知だ。国民が知ろうとしない。みんな隠そう隠そうとした。それがいけないんだ」ということを言ってます。

〔ハンセン病資料館開設の発端？〕それは、大谷先生が藤楓協会の理事長になって。で、高松宮が、40周年になったら、もう藤楓協会の役目は終わったから解散しなさいって、そう言ってたっていうんだよ。じゃ、藤楓協会の40周年記念に、ぜひ資料館を建てようっていうことで、大谷先生が発案して。全生園（うち）はその前から「ハンセン病図書館」というのがあって、資料を集めていたから、それは大賛成だと。ぜひ造りましょうっていう話になって。3年も前からその委員会ができて、NHKのなんとかだって偉い人がいっぱい〔委員に〕入って。〔でも〕なんにもしねえんだよ。会合やったって、なんにもまとまらねえんだ。うちのほうはもう早く、敷地を決めてくれつつ、杭打ちをして。それで、資料集めをやろうつたら、大谷先生が「じゃ、回ってくれ」つうことで、回り始めて。

それで、全国でね、資料館〔建設〕のお金、7億円集めるつったけど、5億5〜6千万ぐらいしか集まらない。どうしても足りないというんで〔あらためて〕全国へ呼び掛けて、全療協が〔率先して〕1億3千万をハンセン病関係で集めた。そのうちの8千万円を多磨で集めたんですよ。5千万円を他の15の療養所で集めた。いかに多磨がものすごくやったか。もう退院した人や、中の傷痍軍人や、百万円くれた人が23人ぐらいいる。ここへ納骨堂を造るときも、

自分たちが入るところだから自分たちで〔お金を〕出して造ろうつって、みんな寄付してくれたけど。資料館は〔自分たちの生きた証を〕残すところだからつうんで、みんな進んで出してくれて。

高松宮記念のときは、運営費を、僅かだったけど〔国から〕もらってたんですよ。そのときは、人件費が年間 300 万。10 人も運営委員がいて、働く人もいっぱいいたでしょ。だから、ぼくたちはみんなボランティアでやろうつって。それでも、運営委員の手当てが〔月額〕5000 円あるから、もう 5000 円もらって〔月〕1 万円でやってた。「かわいそうだから、超勤手当でやるよ」って、3200 円付けてくれて、13200 円でずうっとやってきたんですよ。だけど、外の人たちは、5 万とか 6 万とか払いましたけどね。

「人権の森」

将来構想〔ですか〕。他の園は〔慌てて〕なんとかかんとかいろんな図面やら文章やらいっぱい並べてるけど、全生園（うち）はもう平成 14 年から、全生園全体を記念公園「人権の森」として残してくれということで、市と一緒に頑張って厚労省へずっとお願いをしてる。NPO「東村山活き生きまちづくり」も「人権の森委員会」というのを作って、ここを定期的に掃除をしてくれたり、「〔東村山市〕緑を守る〔市民〕協議会」も、ここで毎年「秋の〔緑の〕祭典」をやってくれてる。また、市のほうでも、〔平成 21 年の全生園〕百周年に合わせて「いのちとこころの人権の森宣言」を決めて、記念碑を建ててくれた。それで、〔今月の〕6 日に人権擁護委員や弁護士やら 70 人ぐらい来てくれて、そこで除幕式をやった。そのあと、こんだ、市のほうで、「人権の森〔構想推進〕基金」を条例でつくってくれた。

それと、うちは、保育園の問題がある。「花さき保育園」というのが近くにある。市の土地に 3 階建ての保育園なんだけど、建物（うち）がボロボロで、いまにも崩れそうで、危なくてしょうがない。運動場もない。それで、年中ここへ遊びに来てる。それで、ぜひ、この中へ〔新しい保育園を〕建てさせてくれという要望があって。将来構想検討委員会でも、みんな「いい、いい」ということになって。ところが、〔国に〕借地料（とちだい）を取られるという問題がある。国会で〔共産党の〕小池晃議員が質問して、長妻〔昭〕厚労大臣が「低額にするように頑張ってます」〔って答弁〕。——〔私は保育園の誘致が実現する〕といいと思ってる。これまでも）こんなかで運動会やったり、暮れの集まりを公会堂でやったり。そうすると、保護者（ふけい）もみんな来て、250～60 人になって、ものすごく賑やかなんだ。

家族とのつながり

〔家族とのつながり？〕草津にいるときは、弟が 1 回面会に来ただけで、全然なかったなあ。あと、全生園（ここ）へ来ても、死んだ妹と弟は、何回か来たけど。そのあと、ぼくが怪我してからは、しょっちゅう来るようになって。ぼくも一年にいっぺんぐらいは〔うちへ帰って〕みんなと会って。旅行も何回もしてますし。去年はうちの家内（かあちゃん）の 88 のお祝いだなんていって、きょうだいみんなで、温泉へ連れて行ってくれたし。

〔お袋は、昭和 62 年 2 月 3 日〕高松宮が亡くなった 1 時間あとに亡くなったんですよ。〔危篤だというので〕お母さんのとこへ行くときに、高松宮が亡く

なったという放送を聞いた。病院へ行ったら、お母さんが亡くなったんだから。

ぼくが〔草津へ〕行っちゃってから、〔うちは〕葛飾の四ツ木のほうへ引越したのね。〔そこでお母さんが〕金町教会へ行くようになったら、朝鮮のおばさん連中がみんな来るもんで、話が合うって、そこじゃ〔朝鮮語で〕話したみたい。だから、お母さんのお葬式は金町教会でやったんです。それで、長男だから、ぼくが挨拶して。おばさんたちにはお礼を言ったんですけど。

〔ぼく自身は、朝鮮語は〕全然喋れないんで、全生園（ここ）に来たときに、光岡良二さんと山本春子さんの3人で〔勉強した〕。東村山に「朝鮮問題研究会」というのがあって。それ、日本の人たち、東京都の水道組合の幹部だとかそういう連中と一緒に朝鮮語の〔勉強〕。朝鮮大学校から崔（チェ）先生が来て教えたんですよ。それで、まあ、読むのはみんな読めるようになったけど。喋るのはちょっと中途半端、聞くのも中途半端ですね。喋りたいけど、なかなか喋れないですよ。〔そういう機会がない。〕うちの連中はみんな帰化しちやって、全然〔朝鮮語を〕喋るのがいないし。

韓国の定着村訪問

〔私の国籍は〕韓国です。もう30年ぐらいになるかなあ、韓国へ初めて行ったときに、国籍を変えなきゃダメだっていうんで、兼子さんもぼくも一緒に〔朝鮮籍から韓国籍に〕変えた。〔日本キリスト教〕救癩協会〔の理事長をやった〕嶋崎紀代子さんたちと一緒にいったときに、変えたんですね。〔韓国へは〕あと2回行ってます。日本財団の笹川陽平会長と一緒に。定着村は1カ所か2カ所、行ったかな。それと、ソロクトは行ったなあ。あと、民俗村にも行ったし。

全羅北道〔の定着村〕へ行ったときは、世界の回復者のIDEAの組織の3人の会長の一人が〔韓国の人なんだけど〕、その人が世界のIDEAの費用（かいけい）をぜんぶ受け持ってるんです。韓国の定着村は90カ所もある。その一つのソウルの近くの定着村は、工業団地みたいに、外〔の会社〕に工場を貸している。その家賃をもらうだけで、ものすごく〔収入が〕ある。そこから資金をもらって、世界のIDEAの活動をしてるわけね。ソウルに近いところは〔地価が〕どんどん上がったらしくて。そういうところは、うんと得したって。

全羅道のほう〔の定着村〕も〔そこで働いてる人は〕半分以上は外の人なんですよ。定着村の回復者は、事務所でみんな机に座ってやってるだけ。肥料工場をやってるんだけど、袋詰めもみんな機械化されてコンベアでバーッと運んで。鶏も何万羽も飼って、卵を市場へ納めてる。うんとよくなってる。

親代わりだと会いに来てくれるのが楽しみ

〔全生園〕百周年の記念誌（あれ）を作らなきゃならないし、「資料館だより」をまた編集して、月曜日に出さなきゃなんないし。過労気味ですよ。外の連中がどっかへ連れて行ってやるとか遊びに行こうつっても、行ってる間がないですよ。で、明後日は、草津から出た子が遊びに来るんだけど、その子は8歳のときに草津へ入って、うちのかあちゃんやぼくたちが面倒をみた子で。長島の新良田教室（こうこう）を出て、退院して。それで、子ども2人できて。女の子はカヌーの選手で、推薦で大学に受かった子なんだけど。その子たちは私たちが親代わりだと思って〔くれていて〕。結婚式にはぼくたちをいちばん上段に据えて、大事にしてくれた。もう、小さいときからしょっちゅうここへ遊びへ

来てたし。ほんと、そういうところは幸せですね。

註

- 1 語り手の佐川修は、「栗生楽泉園」の代わりに「草津」,「身延深敬園」の代わりに「身延」,「菊池恵楓園」の代わりに「熊本」と、療養所名で言わずに所在地で表現することがほとんどだった。療養所名の代名詞なのか単なる地名なのかは適宜判断してほしい。
- 2 中原弘の語りは、『栗生楽泉園入所者証言集(中)』に『園から出て行け、外で按摩でもやれ』と言われて……』と題して収録。
- 3 荻雄二が多磨全生園から栗生楽泉園に移ってきたのは1951(昭和26)年のことであるから、「綴り方教室」うんぬんの話は、昭和22年の人権闘争、昭和25年の園内での殺人事件よりももう少し後のことになる。なお、荻雄二の語りは、『栗生楽泉園入所者証言集(上)』に「実存主義を超えて——隔離政策と闘いつづける」と題して収録。
- 4 堀田善衛・永丘智郎編『深い淵から——ハンゼン氏病患者生活記録』(新評論社、1956)
- 5 全国国立療養所ハンゼン氏病患者協議会編『陸の中の島——全国ハンゼン氏病患者短歌集』(新興出版社、1956)
- 6 鈴木幸次の語りは、『栗生楽泉園入所者証言集(上)』に「一五の冬に草津へむけて出郷」と題して収録。
- 7 鈴木秀夫の不条理な獄死については、「裁判抜き『重監房』——『ハンセン病と裁判』覚書(その1)」(『日本アジア研究』第15号、2018)を参照されたい。
- 8 佐川修は「宮坂先生がつくった一覧表」と言っているが、実際には、宮坂道夫が論述にあたって依拠した資料「栗生楽泉園特別病室真相報告」のことであろう。
- 9 兼子保志(多磨全生園での園名)の語りは、『栗生楽泉園入所者証言集(中)』に、金奉玉(キムボンオク)の本名で、「手錠をかけられての強制収容」と題して収録。なお、彼は栗生楽泉園では金本奉玉(かねもとほうぎょく)の通名で過ごしていた。
- 10 『風雪の紋』では、このときの「協親会」の会長名を「保利政一」と記載しているが、佐川修の語りでの音は「ホシ」と聞こえる。未確認ながら、ここでは「保志」と表記しておきたい。また、本稿での「大山さん」は、『風雪の紋』では「大屋一郎」。
- 11 岡一郎(本名は韓億洙(ハンオクス))の語りは、『栗生楽泉園入所者証言集(下)』に「死んだらここで日本の土になる」と題して収録。
- 12 2016年4月に最高裁が謝罪するに至った「特別法廷」で、この裁判も行われたということだ。
- 13 外丸八重子の語りは、『栗生楽泉園入所者証言集(下)』に「激動の時代に分館職員として勤めて」と題して収録。
- 14 雑誌『平和』は、1952年から55年にかけて青木書店から41号発行された月刊誌。
- 15 金夏日の語りは、『栗生楽泉園入所者証言集(中)』に「不自由者の身をもっての訴えていまの療養所がある」と題して収録。
- 16 陳述書を元にした浅井あいの語りは、『栗生楽泉園入所者証言集(上)』に「先生になる夢を断たれて」と題して収録。
- 17 1993(平成5)年、高松宮記念ハンセン病資料館開館。2007(平成19)年、国立ハンセン病資料館としてリニューアルオープン。
- 18 西村時夫には『私の履歴書——「らい予防法」を超えて』(2004年、皓星社)の遺作がある。

A Long Zainichi Life as a Hansen's Disease (Ex-)Patient: Sangkweon Kim's Life Story

Yasunori FUKUOKA & Ai KUROSAKA

Mr. Osamu Sagawa (alias in a Hansen's disease sanatorium) was born in Jeollabuk-do Province in 1931. He moved to Japan with his mother when he was quite young. His Korean name is Sangkweon Kim. He found that he had Hansen's disease during the Great Tokyo Air Raid and entered National Sanatorium Kuriu-Rakusenen in March 26, 1945. He moved to a religious sanatorium, Minobu-Jinkyoen in 1958 and then to National Sanatorium Tama-Zenshoen in 1964. When we had the interview with Mr. Sagawa in March 26, 2010, he was 79 years old and he had us at the reception room of the National Hansen's Disease Museum because he served a steering committee member of the museum and the chair of the Residents' Association in Tama-Zenshoen at the same time.

When I (Fukuoka) served as the executive committee secretary general of 11th Citizen's Conference on Hansen's Disease in May 2015, I asked Mr. Sagawa to be the executive committee chair and he willingly accepted the favor. When we visited National Sorokdo Hansen's Disease Hospital in Korea to attend its 100th anniversary in May 2016, we watched a special TV program by KBS, Korean Broadcasting System, that Mr. Sagawa had an interview by KBS in his Korean name, Sangkweon Kim.

We received the interview release permission from Mr. Sagawa in February 19, 2017 when we went to visit him hospitalized. He passed away at the age of 86 in January 24, 2018.

Since Mr. Sagawa had good memory, his testimony covered almost all time and space in detail. We had to make an effort to reorganize and edit his huge story. His testimonies as a witness in Kuriu-Rakusenen upon the food rationing to the special prison, the Struggle for Human Rights in 1947, and the murder case in 1950 were precious. The experiences in Minobu-Jinkyoen and his restless effort to establish and manage the Hansen's Disease Museum were the important information that only Mr. Sagawa was able to tell us.

The characteristic feature of Mr. Sagawa's story is that his storytelling is basically bright. It seems that he was able to keep his composure because he had an experience to survive the hellfire of the Bombing of Tokyo. Although he went through hardship in his entire life, he never lost his composure to enjoy picking wild vegetables and chestnuts. For the community activities, he played humorous music and did acting to interact with non-Hansen's disease people.

We are all happy to hear his healthy and bright voice through the interview recording. We pray for the repose of Mr. Sagawa's soul.

Keywords: Hansen's disease, Segregation Policy, Zainichi Korean, life story